

# 韓国のひとり親家庭で育った子どものライフストーリー

## — 子どもの認識と生活設計 —

李 璟媛

本研究では、ひとり親家族の子どもは、その家族の子どもである自分をどのように認識しているのか、ひとり親家族の生活史は生活設計にどのように影響するのか、以上はひとり親家族になった背景によって異なるのかを分析することを目的とし、ひとり親家族の子どもを対象にライフストーリー・インタビューを行った。分析の結果、ひとり親家族の子どもは、「引け目」「劣等感」「人とは違う」と言葉で自分を表現し、否定的に認識する傾向がみられ、ひとり親家族になった背景による差がみられた。子どもの認識は、生活史を開示することにも影響を与えており、死別によるひとり親家族の子どもは「隠す努力」を、離婚によるひとり親家族の子どもは「淡々と開示」といった形で現れていた。子どもの生活史は、結婚や親との生活を含む生活設計にある程度影響を与えていたが、背景による差はみられなかった。

Keywords：ライフストーリー、ひとり親家族、子ども、韓国

### 1. はじめに

韓国では、「ひとり親」を「ハンプモ」(ブモは父母の韓国語読み)、「ひとり親家族」を「ハンプモ家族」と表現する。「ハン」とは、一つであると同時に一つでも十分であり、満たされるという意味である(クォン・シン・キム・他 2006:227)。

2013年のひとり親世帯<sup>1)</sup>は、171万4千世帯で、ひとり親世帯の統計が初めて発表された1985年(84万7千世帯)に比べると約87万世帯増えている。2013年の一般世帯に占めるひとり親世帯の割合は9.4%(1985年は8.9%)である。そのうち母子世帯が77.5%、父子世帯が22.5%である。ひとり親世帯になった背景は、2010年現在、有配偶<sup>2)</sup>が25.9%、死別が29.7%、離婚が32.8%、未婚が11.6%である(1985年はそれぞれ30.3%、52.3%、5.9%、11.9%)(女性家族府 2014)。

韓国では、ひとり親家族の増加とともに支援に対する関心も高まり、2007年には「ハンプモ家族支援法」が制定された。ひとり親家族を支援する民間団体の活動も活発で、2008年からは民間団体の呼び掛けで5月24日を「ハンプモの日」と名付けて社会的関心を高めるための活動を行っている(李

2012b)。しかし実際には、ひとり親家族の親と子どもの多くが偏見による苦痛を訴えており、ひとり親家族の子どもが差別を受けずに成長できることは困難だと認識する人が多かった調査結果から(韓国未婚母支援network・韓国女性政策院編 2009:43-48)、ひとり親家族に対する偏見や差別が明らかになっている。

本研究では、ひとり親家族に対する社会的偏見を前提にして、ひとり親家族の子どもはひとり親家族の子どもである自分をどのように認識しているのか、ひとり親家族の経験は将来の生活設計にどのように影響するのか、以上はひとり親家族になった背景によって異なるのかを分析することを目的とし、ひとり親家族の子どもを対象にライフストーリー・インタビューを行った。以下ではそれぞれの事例を、1つ、ひとり親家族である子どもの認識、2つ、結婚や結婚生活の設計、3つ、同居している親との生活設計の観点から紹介した後、4つ、子どもの認識はひとり親家族になった背景によって異なるのか、ひとり親家族の経験は生活設計にどう影響するのか、背景による差はあるのかについて考察する。

本稿でインタビューの対象とした子どもはひとり

親家族の経験を持つ20代の未婚者である。その理由は、20代の未婚者は、自分の生活史や親子関係にある程度客観的に振り返ることが可能で、結婚を含む生活の設計を具現できる人であると判断したからである。

## 2. 先行研究の検討

韓国でひとり親家族に関する研究が本格的に始まったのは1990年代に入ってからである。研究の主な内容は、ひとり親家族の生活実態や支援、親のストレスや心理的不安、子どものうつ状態や不安、親と子の社会的適応や親子関係、子どもと非養育親との関係、未婚母の自立、ひとり親家族のイメージなどである。研究対象はひとり親家族の母親が多い。子どもを対象とする研究は少ないが、子どもを対象とした場合でも、研究内容はひとり親家族になってからの生活適応に関するものが多い（李・竹田・上野 2011）（李 2012b）。

では、ひとり親家族の子どもは、ひとり親家族の子どもである自分をどのように認識しているのだろうか。離別によるひとり親家族の子どもをインタビューしたバクは、「離婚した家の子」としてみられることに苦痛を感じ、親の離婚を隠したい恥ずかしい事実として認識し、親の離婚が友達に知られないように注意したり、父親が亡くなったと嘘をつく子どもの姿を報告している（バク 1999）。死別によるひとり親家族の子どもをインタビューしたヤンは、普段はひとり親家族の子どもであることを意識し、親に迷惑をかけないように努力するが、常に模範的な生活を送らなければならないことに苦痛を訴える子どもの姿を報告している（ヤン 2008）。ひとり親家族の子どもに対する教師の認識を分析した研究では、教師は、死別によるひとり親家族の子どもより、離婚によるひとり親家族の子どもを否定的に評価しており（ソン・ソン・ハン 2003）、年齢が高い教師ほどひとり親家族の子どもを否定的に評価する傾向がみられた（アン・イム 2006）。さらに2つの研究からは、ひとり親家族の子どもに対する教師の否定的な評価が、その子どもとの接触経験による評価ではなく、教師個々人の価値観に基づく評価であることが明らかになった。これらの研究からは、ひとり親家族に対する人々の否定的なイメージや態度によって、ひとり親家族の子どもが自分をどう認識するかに影響を及ぼすだろうことが示唆された。

一方、子どもの将来の生活設計に視点をおく研究はなかなか見当たらない。現在の生活については、子どもと親が協力し合いひとり親家族として新しい

家族を形成していく様子が確認されている（キム・イ 2009）（コン 2001）。しかし、これらの研究は、ひとり親家族になってからの子どもの生活適応を分析したものであり、将来の生活設計を取り扱ったものではない。本稿で分析したい。

## 3. 研究方法

本稿の分析で用いるデータは、韓国で2009年にひとり親家族の子どもを対象に行ったライフストーリー・インタビューで得られたものである。桜井は、「語り手はインタビューの場で語りを生産する演技者であって、十分に聴衆（インタビュアー、世間など）を意識している。たんなる情報提供者ではないのである。その意味で、語りは過去の出来事や語り手の経験したことというより、インタビューの場で語り手とインタビュアーの両方の関心から構築された対話的混合体にほかならない」とし、「インタビューの場こそが、ライフストーリーを構築する文化的営為の場である」と指摘する（桜井 2007: 30-31）。ライフストーリー研究における桜井の指摘を参照にし、本インタビューでは、聞き手の関心のみでなく、インタビューの場で形成された語り手と聞き手の共通した関心を確認し合いながら、語り手のひとり親家族になった背景、その後の生活、親子関係、ひとり親家族に対する支援、本人や親の将来などについてのライフストーリーを自由に語ってもらった。

その中で本稿では、先ほど先行研究で示唆された知見を踏まえて、ひとり親家族の子どもは、ひとり親家族の子どもである自分をどのように認識しているのか、子どもの認識に影響を与える要因は何かを考察するための分析を行った。さらに、子どもの認識は、自分の結婚や親の老後を含む生活設計にも影響を与えられたので、本人の将来のみならず親の再婚を含む老後に対する語りも考察した。

今回インタビューを行ったのは、死別によるひとり親家族の子ども2人と、離別によるひとり親家族の子ども2人である。調査対象者（＝語り手）のプロフィールや研究者（＝聞き手）との出会いは表1に示すとおりである。インタビューの前に聞き手は、研究目的、インタビュー参加の任意性、語りの内容の修正と削除の任意性、個人情報守秘・匿名性などについて説明し、分析結果公表の承諾を得た。インタビューの録音許可を得てからインタビューを始めた。インタビュー時間は1人あたり1時間15分から1時間45分程度である。使用言語は韓国語である。

表ー１ 語り手のプロフィールと聞き手との出会い

語り手	Pさん	Gさん	Kさん	Lさん
性別	女	女	男	女
年齢 (職業)	24歳 (国立大学4年生)	28歳 (社会福祉士)	23歳 (国立大学4年生)	20歳 (私立大学1年生)
ひとり親家族になった背景	死別 (小6の時父親が病死)	死別 (中1の時母親が病死)	離別 (中1の時両親別居→中3の時離婚)	離別 (小5の時母親の家出→別居→小5の時離婚)
ひとり親家族になった直後の家族状況(人数)	Pさん・母・姉・姉 (4人)	Gさん・父・兄・姉 (4人)	Kさん・母・2人の姉・母方祖父母 (6人)	Lさん・母・兄 (3人)
現在の家族状況(人数)	Pさん・母・下の姉 (3人)	Gさん・父・姉 (3人)	Kさん・母・上の姉・母方祖母(4人)	Lさん・母・いとこ(母の弟の娘)(3人)
親の職業と経済状況	母親は専業主婦。父親の遺族年金で生活。今は、豊かではないが、生活に困難はない。	父親は無職、年金受給年齢に達しておらず無収入。生活費は子どもが捻出、経済状況は厳しい。	母親は介護士。離婚後は厳しい経済状況だったが、今は安定している。	母親は自営業。離婚後は厳しい経済状況だったが、今は安定している。
親子関係	何でも話せる友達のような関係。	父を思う気持ちは強いが、愛情表現が苦手で会話が少ない。	大の仲良し関係。母が喜ぶことを第一に考えている。	仲のいい友達のような関係。
その他の状況	上の姉は結婚で分家。インタビュー当時は、結婚した姉が出産のために実家に帰省中。	Gさんはインタビューの1か月前に夜間の大学院を修了。兄は結婚で分家したが、車で1時間の場所に住み、頻繁に実家を訪ねている。	Kさんの親権者は父親、養育権者は母親。父親は再婚後Kさんが大学1年の時死亡。父親とは不定期的に交流、親密な関係ではなかった。	兄は外国の大学に留学。インタビュー当時は、韓国に戻り軍服務中。兄とLさんの親権者・養育権者ともに母親。父親とは頻繁に交流。
聞き手と語り手の出会い	語り手は、聞き手の恩師の教え子で、恩師に研究の趣旨を説明して紹介してもらった。	語り手は、聞き手の共同研究者の教え子で、共同研究者に研究の趣旨を説明して紹介してもらった。	語り手は、聞き手の恩師の教え子で、恩師に研究の趣旨を説明して紹介してもらった。	語り手は、聞き手の知人の知り合いの娘で、知人から語り手の母親に研究の趣旨を説明し、娘を紹介してもらった。

注1) 韓国では、満年齢ではなく数え年を使用するため、年齢はインタビュー時に語り手から示された数え年を記載した。離別によりひとり親家庭になった場合は、親の離婚までの経過については、子どもからの情報に基づいてそのまま記載し、離婚後の家族状況については、子どもの立場からみた家族関係を示した。

注2) 韓国の小・中・高校の学制は日本と同様に6・3・3制である。

#### 4. 事例分析

##### (1) 父との死別によるひとり親家族の子のライフストーリー：Pさんの場合

###### (a) プロフィール

Pさんの家族は、両親と2人の姉の5人家族であったが、Pさんが小6、2人の姉が高3、中3の時、父の死亡によりひとり親家族になった。Pさん家族の収入源は父親の遺族年金のみで経済状況は厳しかった。Pさんの親族は経済状況を理由に3人姉妹の大学進学を反対したが、両親が加入していた「教育保険」で対応したり、アルバイトをしなから、3人とも大学に進学している。それでも経済状況は厳しく、Pさんは学費を稼ぐために2回休学している。現在、Pさんは、教員を目指して勉強中である。

###### (b) 認識

Pさんはひとり親家族の子どもである自分について「気づかれなかった」、「恥ずかしいことではないけど、恥ずかしかった」、「引け目がある」、「安

定していない家庭の子」と表現した。Pさんが、ひとり親家族の子どもである自分を「恥ずかしい」と認識したのは、中学生になったばかりの時である。健康だった父が突然死亡したために父の死を実感できずにいたPさんは、クラスみんなに父親の不在を知られる状況になった時、父の死を実感するとともに、父の不在を恥ずかしく思ったという。そして、周りに気づかれたくない思いで苦しんだと何度も語った。

P：中学生になると家庭調査するでしょう。そういうのがちょっと…（中略）書くのは書くんですが、ちょっと恥ずかしくて……恥ずかしいことではないけど、知られるのがいやで、ちょっとそんな感じでした。

父が亡くなった小学生の時は、周りがその事実を知っていたので仕方がなかったが、父の不在を気づ



かれたくない思いは高校生や大学生になっても続き、ひとり親家族であることを開示することはできなかったという。その理由は、みんなが楽しんでいるその場の雰囲気を壊したくなかったからである。一方、仲良くなった友人にはタイミングを計って打ち明けた。開示するには決心が必要だったとPさんは語った。

P：高校の友達は仲のいい友達なのに言えなくて。笑って楽しい雰囲気なのに、私が少し暗くて重たい雰囲気を作っていて、あまり話せてなくて…えーと、少し後で話しました。

\*：そうか。なんかきっかけがありましたか？

P：えー、言わなければ…ハハ。言わなければと思っているのに、言えなくて…そのうち話しました。

### (c) 結婚や結婚生活の設計

さらに、Pさんの自分に対する認識は、結婚について話した時、「安定していない家庭の子」という表現に現れた。ひとり親家族の子に対する世間の偏見に対する思いからの発言で、ひとり親家族はいわゆる「標準家族」から逸脱する家族であるために不安定であり、その状況から抜け出す方法は安定した結婚にあるというのが、Pさんの認識であった。したがってPさんも早い結婚を望んでいる。

P：パパが不安定な家庭の子が早く結婚したがる気がします。私も早くしたいです。

\*：うん？パパが不安定な家庭というのは？

P：私みたいな家庭が正常ではないでしょう。…うん。結婚は早くしたいです。落ち着きたいです。もっと安定的になりたいです。

現在、Pさんには結婚を意識しながら付き合っている人がいるが、彼には、父の不在についてなかなか打ち明けることができず悩んだという。彼は打ち明けた後も変わらずPさんに接してくれているが、Pさんは彼との結婚を意識すると、父親の不在を実感し引け目を感じてしまうと語る。

P：えーと、はじめはあまり言えなかったです。はじめは言えなかったですね。別に本当になんともないことだけど。

\*：話したきっかけは？

P：ずっと言わないと、言わないと…結構、パパとママの話が出るでしょう？隠している…何か言わないとウソになるから、だから話さないといけ

ないけど、できなくてずっと悩んで、…話して、ママにも会ってもらって。彼の両親もすべて知っているみたいです。でもなんだか、うちの方が少し劣っているような気が。ハハ。そんな感じです。

\*：そうか。

P：パパが生きていたらよかったのにと…

### (d) 親との生活の設計

Pさんは結婚後に母と同居したいと考えているが、母親はひとり暮らしを望んでいるという。そこで聞き手は、Pさんに母親の再婚について質問してみた。Pさんにとっては予想もしなかった質問だったらしかったが、戸惑いながらも肯定的な考えを示した。

P：それは考えたことはありません。ハハ（中略）それは…いい方ならば私は悪くないと思います。はい。

\*：そうか。もしですが、お母さんがそのように頼りたいという方がいれば反対はしない？

P：今のところ反対はしないですが、また、現実には…現実的にはよく分かりません。…性格のいい方ならばいいと思います。

### (2) 母との死別によるひとり親家族の子のライフストーリー：Gさんの場合

#### (a) プロフィール

Gさんの家族は、両親と兄、姉の5人家族であったが、Gさんが中1、兄と姉が高2、中3の時母親の死亡によりひとり親家族になった。両親はクリーニング屋を営んでいたが、父親は健康上の理由で、インタビュー時の2年前に店を閉めている。Gさんは大学卒業後社会福祉士として働きながら夜間の大学院に通い、インタビューを行った1か月前に大学院を修了している。

#### (b) 認識

Gさんがひとり親家族の子どもとしての自分を強く認識したのは、卒業などの学校行事の際に母親が出席できないという現実を受け止めざるを得ない時であった。その時を思い出したGさんはひとり親家族の子どもである自分について「なんとなく恥ずかしいと思った」と語った。それは、Gさんが母の死後の父の生活などの状況を語った時の発言である。

Gさんの母親は約10年間にわたり入退院を繰り返しながら闘病生活をしていたが、家に戻った時は、仕事やボランティア活動を楽しんでいた。母がいる時は、両親の経営する店が近所の人のたまり場になっており、笑いが絶えなかったという。母親は

社会的で明るい反面、父親は自分をあまり表現しない人だったので、父親のきょうだいも母親を慕っていた。親戚や近所との交流において中心的な役割を果たしていた母親がなくなった後、父のきょうだいや近所の人の往来も少なくなり、父は孤立していたという。Gさんは、父は妻を亡くし親族とも疎遠になり、苦しかったはずなのに子どもにも相談できず辛かったはずであると、父親の気持ちを察した。

しかし、そのGさんも自分のことについて誰にも相談しておらず、高校までは友達に母の不在を語ることができなかった。何だか「恥ずかしかった」からだという。その語りをみよう。

\*：お母さんのことを友達や周りに話したことは？

G：私はその部分に関しては言えなかったです。言ってはいけないような気がして。

\*：なぜいけないと思いましたか？

G：なんとなく恥ずかしいと思ったり…なんとなく…ハハ。だから私は中学生の時に、えーと中3、高3の時に卒業式の時（涙ぐむ）親がくるでしょう…ああ…。…そういう時に話したと思います。私は母がいないから来ないと。恥ずかしかったと思います。あの時なぜ恥ずかしいと思ったんだろう…今は本当に楽に話していますが。ところが…あの時はそれが本当に辛くて、私に母がいないということを……（しばらく泣く）

Gさんが、ひとり親家族は「恥ずかしいことではない」と思い、母の不在について自ら周りに開示するようになったのは、大学生になり友達と接する中で家族の形は様々であることを認識したからである。

G：大学に入ってみたらそういう友達もたまにいて、そういう話がそんなに苦ではなく、家族の、友達がいろいろと様々で、ひとり親家族や離婚家族がいたりして。よくわかりません。不思議と大学に入ったら気持ちが、こう。（中略）それだとなんとかこういう話をするのがそれほど恥ずかしいことではないと思うようになりました。

#### (c) 結婚や結婚生活の設計

そのGさんが、最近再び母親の不在という現実に悩みと不安を感じるようになったと語った。それは聞き手が「生活の中で最も大変だったこと」を質問した時に発信された。

それほど結婚願望がないと語るGさんは、その理

由として、1人で人生を楽しみたいという願望もあるが、母の死後10年以上も家事を担当したことに疲れたかもしれないと語った。さらにGさんは、姉や自分が結婚を考える年齢になってから、母の不在をより強く意識し、不安を感じるようになったという。つまり、将来について相談でき、頼れる母親がいないことに不安を感じており、それは母と子のひとり親家族では生じない不安であると認識していた。Gさんにとっては、父子のひとり親家族の子であることそのものが、将来の生活設計を考えるのに不安要素として働いていたのである。

G：最も大変だったのは心理的なこと。小さい時はあまりよくわかりませんでした。なんというか母の存在感みたいなもの、子どもを産んだら誰がみてくれるのかなとか、これから起こることに対する。姉がこれから結婚したら、私がそういうのを手伝ってあげないといけないと思うけど。

\*：そうか。

G：どんなふうにしてあげられるのかな。こういう話は母としたいのに、母とできないこと、そういうことです。ま、本当に心理的に母親という存在そのものが、存在感がないというのが一番大きい不安だと思います。

#### (d) 親との生活の設計

Gさんは自分の結婚には消極的であるが、父の再婚は積極的に支持する。しかし父の再婚には経済的な問題を含む壁があるという。父が再婚するためには経済力が必要であるが、母の死後体調を崩した父は営業していたクリーニング店を閉じた後、仕事に就いていない。父はまだ年金受給年齢に達していないため収入もない。家計担当者としての役割が男性に期待されている韓国の状況を考慮すると、父親の再婚を望みながらも「経済力のない父と結婚する女性がいるだろうか」と語るGさんの悩みも頷ける。現在生活費のすべてはGさんきょうだいが負担しており、実は父の老後に備えて計画を立てることすらできない経済状況である。そのためにGさんは父の老後にも非常に不安を抱えていると語った。さらに、姉が結婚したら父と2人暮らしになるため自分の負担が増すのではないかと不安を抱えているGさんは、父の幸せというよりは、自分のために父の再婚を望んでいるのではないかと、それは親不孝な考えではないかと悩んでいた。

#### (3) 父との離別によるひとり親家族の子のライフストーリー：Kさんの場合

## (a) プロフィール

Kさんの家族は、両親と2人の姉の5人家族であったが、Kさんが中3、姉が大学4年、2年の時に両親が離婚しひとり親家族になった。Kさんは父親の金銭トラブルと家族への暴力が離婚の原因であると理解している。Kさんは、大学卒業後、将校として軍に入隊することが決まっており、軍服務後は教員になりたいと考えている。Kさんの父母が離婚する際、Kさんの親権は父親に、養育権は母親におかれた。Kさん自身は、父親との交流にそれほど積極的ではなかったが、母親の強い要望に応じて、家族の重要な行事がある時は父親と交流し、親子関係を維持していた。Kさんの父親は、Kさんが大学1年生の時に死亡している。

## (b) 認識

Kさんの両親はKさんが小学生の時から何度も離婚話をしていたが、Kさんは親の離婚に反対していたという。しかし、中学生になってからは、母にとって離婚が最善の選択であることを理解していたので、親の離婚によりひとり親家族になったという現実を肯定的に心から受け入れたという。Kさんは、両親の離婚について、別居していた父がKさんに会いにきて離婚の報告をしてくれた日を振りかえて、「そんなに悲しくなかったような気がします」と回想した。

K：そうか。勉強しよう。ただ勉強頑張ろう。勉強して私が目標としたこと頑張ろう。こんなことしか考えませんでした。そんなに悲しくなかったような気がします。(中略)父が学校に来て離婚を知らせて、その日は、少し落ち込んで憂鬱でしたが、次の日はすぐ普段通りの生活に戻りました。

Kさんの父は専門職に勤めていたが、酒や金銭によるトラブルが絶えず、生活費はすべて母が担っていた。離婚後も父の借金を母が返済していたので経済状況は厳しかったという。しかしKさんは、親の離婚によって安心して生活できるようになったので、親の離婚で辛い思いをしたことは一切なかったと語る。Kさんは離婚後熟睡できるようになった母をみて自分も安心することができたといい、「私にはママがいたからすべて大丈夫でした」と語った。Kさんは、ひとり親家族であることは避けることのできない自分の生活史の一部であると語った。両親の離婚については学校の先生にはすべて打ち明けて助けてもらっており、友人にも「淡々と」打ち明けている。ただ、Kさんが父の再婚と死を含むすべてを打ち明けるのは、生涯付き合いたいと決心した

友人のみであるという。

\*：そういう話をしようとした時、友達の反応はどうかなとか、考えたことがありますか。

K：うん。あ、でも、私の友達の反応よりはですね。ただ話します。私がこの話をしながら、この子とは一生付き合おう、そうしようと。

\*：そうか。

K：はい。友達の反応も、私が、いったんは私の気持ちが重要でしょう。

\*：そうね。

## (c) 結婚や結婚生活の設計

Kさんは結婚を含む自分の未来について楽しく話してくれた。今気になっている人がおり、ひそかに彼女との将来を夢見ることもあり、できれば早く結婚して子どもを産みたいと語る。

Kさんが、結婚などの生活設計のすべての場面において優先するのは、妻の意見を尊重することである。Kさんの父親は、離婚前も自分の時間や金銭などすべてを本人のためだけに費やし、家族との関係においても妻や子どもの意見を聞いたことは皆無だったという。「父のような夫になりたくない」、「父とは違うよいパパになりたい」と考え、父親を反面教師として位置づけているKさんは、したがって将来は妻の意見を尊重する夫になり、子どもとの思い出をいっぱい作れる父になりたいと考えている。Kさんは、離婚後子どものために一生懸命に生活してきた母親を尊敬しており、母親が喜ぶことなら何でもすると断言する。結婚後は母親との同居を計画している。しかしながら、母との同居を含むすべてのことについては、まず妻の意見を優先するつもりであると語る。母親が結婚生活の中で、夫や夫の家族との葛藤で苦しんでいた姿を経験しているKさんは、自分が選択した妻の意見を最優先し、家族を守るべきであると考えていた。さらに、幼い時に父と一緒に何かをした記憶もないと語るKさんは、自分の子どもとは普通の親子関係を経験したいと語った。

## (d) 親との生活の設計

Kさんは就職したら実行したいいくつかの計画があるという。母に人間ドックをプレゼントすること、2人でミュージカルをみに行くことなどである。また、「ママは太陽のような存在。ママさえいれば幸せ」と語るKさんは、母を喜ばせるためなら何でもすると断言する。母への愛情表現も豊かである。

K：私が本当にママに愛嬌を振り回しているから。



私はママの喜び組だからです。

＊：ハハ。ママの喜び組ですか？

K：はい。ママはいつも私に笑顔ですし、また私もママと一緒にいるとすごく安心して落ち着いて、もともと昔からとにかくママの匂いが好きで。(中略)

＊：ママに愛しているとかいいですか？

K：はい。ママには愛しているとも言いますし、チューもしたりします。

母親の老後については母を交えて家族全員で話し合っているという。Kさんは介護士として働いている母の健康を気にし、Kさんが就職したら仕事を辞めてもらいたいと考えている。しかしKさんの母は、仕事を継続するのはもちろんのこと、子どもの結婚後は別居して自分の人生を生きる計画を立てているという。Kさんは、母との同居を含む今後のことは母と妻の意見を尊重して決めたいと語った。

母が大好きであるKさんに母の再婚について聞いたところ、大きい声で笑い「早く孫を作ってあげたい」と答えた。今まで母の再婚について考えたことがなかったらしく慌てた様子だった。しかし、しばらく考えた後、「分かりましたと言わなきゃ」と答えた。

K：今、ママが寂しいだろうなと思います。まーだから、必ず結婚じゃなくても再婚じゃなくても、もし、こんなに一緒に映画でもみに行ける…なんと言うか…それは大丈夫のような気がします。あ。今は分かりません。ハハ。だから反対は。まーママが好きといたら分かりましたと言わなきゃ。

#### (4) 父との離別によるひとり親家族の子のライフストーリー：Lさんの場合

##### (a) プロフィール

Lさんの家族は、両親と兄とLさんの4人家族であったが、Lさんが小学5年生の時に両親の離婚によりひとり親家族になった。Lさんは父親の金銭トラブルが離婚の原因であると理解している。Lさんは、高校を卒業するまでは父親から経済的支援を一切受けていなかったが、Lさんが大学生になった時に、Lさん自ら、父親に経済的支援を要求したという。それをきっかけに、現在は、大学関連費用のほとんどを父親から負担してもらっている。Lさんは、将来国際関連職業に従事したいと考えている。

##### (b) 認識

Lさんは、ひとり親家族の子どもである自分について「劣等感がある」、「人とは違う。いい意味では

ない」、「レッテルがついた子」と表現した。ひとり親家族になって劣等感を持つようになったと語るLさんは、劣等感は不足から生じた感情であり、不足とは家族員の欠如と経済的困難を意味すると語った。さらにLさんは、自分の立場を「人とは違う。いい意味ではない」といい、「違う」こととは、世間から離婚家庭の子というレッテルが貼られ、そこから偏見が生まれることを意味すると語る。そしてその状況に置かれている自分を不幸に思ったと語った。

L：劣等感はあったと思います。

＊：どの面で感じました。

L：不足です。家族に隙間があって、ま…離婚した当時はママの経済状態が良くなかったし。また、私が一応、あ、私は他の人とは違うんだ。ところがそれが、いい意味の違いではなく、ま…私はパパと離れて暮らしている。ひとり親家庭の子だ。(中略) 私たちはある日突然、私は変わったことは何一つないのにレッテルがついてしまうじゃないですか。ひとり親家族だと。私は少しも変わってなくて、私はそのままなのに。人は急に私をかわいそうな子で見始めて、私はいきなりある日突然、かわいそうな子になって、私はそのままなのに。

一方、Lさんは、両親の離婚は他人との新しい関係を構築する際、一度は語らなければならない過去であり、人生の重要な一部分だと語る。Lさんは両親の離婚という過去が辛い記憶ではあるものの、心の傷になることはもはやなく、自分のことを開示することが、時には人と親密な関係を結ぶための戦略になることもあると語った。

＊：ごめんなさい。昔のことをずっと思い出させて。

L：いいえ。実は、ま、この話がすごく私には重要な私の人生において重要なことですよね。友達を作ったり、人に近づいたりする時はこういう話は必ず出るでしょう。

＊：そうね。

L：実は家族はこうという話をする時…実は、今はほとんどこれについて動揺するとか、傷つくというのはほとんどなくて…ま、よくない記憶でも、今は私が生きてきた一部分？ただ一場面のような気がします。

Lさんは、ひとり親家族の子どもであることにつ

いて否定的な言葉で自分を表現することも多かったが、両親の離婚については肯定的に受け止めていた。Lさんは、両親の離婚によって父と別居することになったが、父とは定期的に会っており、現在も良好な親子関係を維持している。Lさんが父と交流することについて、Lさんの母親も積極的に協力してくれているので、離婚前と比べるとかえって父との関係が深くなったと語るLさんは、父を人生のよきアドバイザーとして位置づけている。母と子のひとり親家族であるが、日常において父と交流し続けることができているLさんにとって、父の存在は、両親の離婚をLさん自身の人生における大事な一部分として受け止めるのに影響を与えている様子であった。その結果、Lさんは両親の離婚について「恥ずかしいとは思わない」し、その事実も周りに「淡々と知らせて」、「仲良くなるきっかけ」にしていると語る。

L：ところで、家のこと、深刻な話は、それが武器にもなるんです。それで、人と仲良くなりたいとき、なんか、私の心を開くとその人も、本当に…こういう話は簡単ではない話だと分かっているから、確実に私と仲良くできるんです。相手も心を開いて、知り合えるようになり…

聞き手は、Lさんに最初にあった時、積極的に自分を表現する非常に明るい人という印象を受けた。しかし、インタビューを進めるうちにその明るい印象はLさんの努力の産物であることに気付いた。Lさんは、「ひとり親家族の子どもの行動は、すべて周りを納得させる理由を必要とする」ことに戸惑いを示した。例えば、Lさんは考え事をするのが好きな物静かな性格であるが、両親の離婚後性格が変わったという。なぜならLさんが無口になると、Lさんを幼い時から知っている近所の人や友人でさえ、必ずその理由を確認しようとするからである。それは、ひとり親家族の子どもだから何かがあるはずだという先入観から生まれる確認であると、Lさんは語る。また、Lさんは、離婚家庭の子どもであることで社会からレッテルが貼られることに傷ついていた。決して肯定的な意味でのレッテルではないことは言うまでもなく、そのレッテルとともに同情されることも社会の偏見から生じていると語った。ひとり親家族に対する社会の認識を理解しているLさんは、「私の行動は母の評価につながるから」といい、自分や母親を守るために意識して「常に明るく行動する」、「挨拶をきちんとするように努力する」ことで、いわゆる「非標準家族」の子どもの行動に対す

る世間の厳しい評価を克服しようとしていた。

### (c) 結婚や結婚生活の設計

現在、付き合っている人はいるが、まだ若いので結婚までは考えられないと語るLさんに、結婚について意見を聞いたところ、「当然離婚はしない」と答えた。なるべく早く結婚したいと語るLさんは配偶者の条件として「家庭的な人」をあげた。それは、父親が出張で家を留守にすることが多く、そのことで母親が寂しい思いをしたことも離婚の1つの要因であったと考えているからである。

\*：結婚観などはどうですか。考えたりしますか。

L：当然離婚はしない。ハハ。先に思います。

(中略)

\*：夫とはどういう関係を望みますか。

L：それは家庭的な人に出会いたいです。

\*：家庭的というのは具体的にいうと？

L：家に関心が多い人。それとやさしい人…ま、そんな感じです。家、家を…家にいっぱい戻り…家にくっついていて。

\*：ハハ。家にくっついていて？

L：フフ。家族単位で考える。

### (d) 親との生活の設計

Lさんの母は、現在再婚を考えており、Lさんも母の再婚相手と会っているが、以前は母の再婚に反対していたという。はっきりした理由はなく、とにかく再婚という言葉だけで傷ついていたと語った。しかし、親の離婚経験がある友達から「Lさんのママは若いのにずっと一人でいるのはかわいそうだ。ママを理解してあげないと」と言われ、母の再婚を真剣に考えるようになり、その結果、母の再婚を支持するようになったという。そして、Lさん自身が大学を卒業した後は外国で生活したいという希望を持っていることも、母の再婚を心から支持するようになった理由であると語った。さらにLさんは、母の幸せを第一に考えられるようになったのは、自分が今幸せだからと語ってくれた。Lさんは、母の老後についてまだ具体的な設計はしておらず、一緒に暮らすという漠然とした将来を考えていたが、母の再婚計画が具体的にになるに従い、母の老後について安心できるようになったと語った。

## 5. 考察

### (1) 子どもの認識と背景との関連

本稿におけるひとり親家族の子どもの属性は、死別によるひとり親家族の子どもが2人(PさんとG



さん)、離婚によるひとり親家族の子どもが2人(KさんとLさん)である。ひとり親家族である自分のことを「恥ずかしかった」と語ったのは、PさんとGさんで、「劣等感、引け目を感じる」と語ったのは、PさんとLさんである。Lさんはさらに「人とは違う。いい意味ではない」とも語った。Kさんからはいずれの表現も見られなかった<sup>3)</sup>。

ここです、「恥ずかしかった」という表現に注目してみよう。PさんとGさんが恥ずかしい思いをしたのは、親の不在を知られるかもしれないという状況に直面した時である。親の死でひとり親家族になった子どもが恥ずかしいと思わなければならない理由はどこにもないはずなのに、PさんとGさんは、親の不在を恥ずかしいこととして認識していた。そしてそのことは、自分のことを周囲に「開示する」ことにも影響を与え、2人は親の不在を周囲に気づかれないように「知られない努力」をしている。もちろん、ひとり親家族の子どもが自分の生活史を開示しなければならない義務はない。しかし2人は、友達との普段の会話で親のことが話題になった時でさえ、「知られない」努力をし、開示できないことで苦しんでいた。

一方、KさんとLさんからは、ひとり親家族であることが「恥ずかしかった」という表現はみられない。特にLさんは、「恥ずかしいことではない」と発言している。KさんとLさんは、親の離婚によりひとり親家族になったが、離婚後一緒に生活している親が離婚したことで明るくなっており(Kさん、Lさん)、離婚が親にとって最善の選択であったことを理解しているために(Kさん)、親の離婚を肯定的に受け止めている。さらに2人は、親の離婚によるひとり親家族の子どもになったことを自分にとって重要な生活史の一部分であると位置づけている。そして、その延長で自分のことを周囲に「淡々と知らせ」、開示することを親密な交友関係を持つきっかけに繋いでいる。

このように4人においてひとり親家族の子どもである認識が異なるのは、どのような背景によるものだろうか。先行研究では、離婚によるひとり親家族の子どもが、両親の離婚を恥ずかしい事実として認識し、周囲にも開示しないという研究結果が得られたが(バク 1999)、本事例では、バクの研究とは異なり、離婚によりひとり親家族になった子どもは「恥ずかしいことではない」と語り、ひとり親家族という事実を肯定的に受け止め、周囲にも開示していた。特にLさんは周りからの否定的な反応を経験しながらも、ひとり親家族の子どもである自分について否定的な認識をしていない。その理由として、

1つ、同居している親と子が良好な関係で、離婚前に比べて安定した生活を維持していること、2つ、KさんとLさんも語っているように、近年離婚が増えた結果、離婚によるひとり親家族がもはや珍しい家族ではなくなり世間の認識が変わってきたということがあげられる。さらに、3つ目、今回の事例から、同居していない非養育親と子との親子関係が、子どもの認識に影響を与えたのではないかと考えられた。KさんとLさんは、親の離婚後も同居していない親との交流を継続している。Lさんは良好な親子関係を維持し、父親を人生のよきアドバイザーとして位置づけており、Kさんは、父との交流に積極的ではなかったものの交流を続けていた。KさんとLさんにとって重要な行事がある時は、別居している非養育親が、親としての役割を果たしており、KさんとLさんは、日常生活において父親の存在を確認している。一方、死別で親を失ったPさんとGさんは、友人との会話や友人の親子の様子を見て、自分を比較することで、自分には親がいないことを恥ずかしいこととして認識し、その認識は、ひとり親家族であることを開示することにも影響を与えている。語り手の認識にこのような違いが生じたのは、親の生と死という「不在」の状況によって影響をうけているのではないかと考えられたが、「不在」の状況の影響に関する解釈についてはさらなる検証が必要である。今後も引き続き分析したい。

さらに、本事例の考察で注意しなければならないことは、離婚によりひとり親家族になった2人の子どもは、別居している親との交流が続いていたこと、同居している親がそれを積極的に支援していた事実である。韓国で、離婚等により子どもを養育しない親が子どもとの面接交渉権を請求できるようになったのは、第7次民法改正による1990年からである。しかし、子どもと非養育親が交流することは少なく、子どもと非養育親との交流に協力する養育親もそれほど多くない(ジャン他 2002)(ユ 2005)。したがって、非養育親との交流が継続していない場合や憎しみのままの親子関係である場合は、子どもにおける認識や開示如何に関する態度も変わってくると思われる。

このような背景との関連で今回の事例は、非養育親と交流を継続していた離婚によるひとり親家族の子どもと、死別によるひとり親家族の子どもとの間で、ひとり親家族の子どもとしての認識とそれに続く開示において異なる結果がみられたが、今後は、複数の質的研究や量的研究に基づいて検証することが必要であると考えている。今後の研究課題として継続して検証する予定である。

## (2) 生活史が生活設計に与える影響と背景との関連

本研究においては、ひとり親家族になった背景にかかわらず、異性との付き合いや結婚を意識することで、ひとり親家族の子どもであることに「引け目」を感じ悩む子どもの姿が確認された。さらに、当事者における「引け目」という感情は、交際相手やその家族の受容の態度とは関係なく、結婚を意識することでより強まることが明らかになった。一方、語り手は早く結婚して安定したいと考える傾向があり、配偶者との関係においては互いに尊重、配慮する関係を持ちたいと希望していた。特に、離別によるひとり親家族の子どもは、両親の離婚までのプロセスを経験していることから、親の夫婦関係や離婚の背景を客観的に理解しており、したがって結婚後は、相手を尊重し配慮しながら夫婦関係を保ちたいと考え、それこそ離婚を防ぐことであると理解していた。

語り手たちは、親との今後の生活設計について具体的な設計をしておらず、同居という漠然とした将来を考えており、ひとり親になった背景による差はみられなかった。

そして、本稿では、語り手は、自分がひとり親家族の子どもであることを常に意識し、「いい子に成長する」(Lさん)、「成功する」(Pさん、Kさん)、「恩返しをする」(Gさん)ように心懸け、将来において「目標を達成する」ことで、人との違いを埋めようとしていることが明らかになった。

## 6. おわりに

本研究は、最初にも述べたように韓国社会におけるひとり親家族に対する社会的偏見を前提にして、ひとり親家族の子どもは、その子どもである自分をどのように認識しているかを分析することから出発している。今回の語り手の4人のうち2人は、ひとり親家族の子どもである自分を「恥ずかしかった」と否定的に認識しており、他の2人は、ひとり親家族の子どもであるという自分の生活史を肯定的に受け止めていた。ひとり親家族の子どもであることを否定的に受け止めていたのは、死別によるひとり親家族の子どもで、肯定的に受け止めていたのは、離婚によるひとり親家族の子どもである。ひとり親家族になった背景によって子どもの認識が分かれる結果になった。さらに、今回の分析では、ひとり親家族になった背景によって異なるこのような子どもの認識は、生活史を開示することにも影響を与え、その結果として、死別によるひとり親家族の子どもは、「隠す努力」を、離婚によるひとり親家族の子どもは「淡々と開示」といった形で現れており、先

行研究とは異なる傾向がみられた。

ひとり親家族の子どもとしての生活史は将来の生活設計に影響を与えることを確認することができたが、背景による差はみられなかった。ただ、ひとり親家族の子どもの生活設計に関する研究成果がみられなかったために先行研究との比較はできない。

本稿の結果に基づいて、ひとり親家族になった背景によって子どもの認識は大きく影響をうけると早急に断言することはできない。しかし、本稿では、ひとり親家族の子どもであることを子どもたちがどのように認識するかによって、自分の生活史の開示や人々との関係を維持するのに影響を与えることが示唆された。今後は、本稿で示唆された知見をさらなる質的研究や量的研究に基づいて検証することが必要であると考えている。今後の研究課題として引き続き分析する予定である。

## 注

- 1) 韓国では5年ごとに「人口住宅総調査」が行われている。同調査では日本の「世帯」に当たる用語として「家口」を用いている。「家口」とは、1人、または2人以上が集まり生計を共にする生活単位を指し、一般家口と集団家口に分類する。一般家口には、血縁家口、非血縁5人以下家口、1人家口があり、集団家口には、集団施設家口と非血縁六人以上家口がある（統計庁 2010：596）。本稿では韓国の「家口」を「世帯」と表記した。また、統計資料などを示す際は「ひとり親世帯」を、その他は「ひとり親家族」を用いた。「ハンプモ家族支援法」におけるひとり親家族は、母子家族または父子家族を意味し、ひとり親家族の母または父とは、①配偶者と死別または離婚した者、配偶者から遺棄された者、②精神、身体の障害で長期間労働能力を喪失した配偶者を持つ者、③未婚者（事実婚や事実婚関係にある者を除く）で、子ども（18歳未満、就学中は22歳未満）を養育している者である。
- 2) 有配偶とは、別居、遺棄、家出、行方不明などの理由により実際にひとり親世帯になっている場合を指す。
- 3) Kさんと約1時間半に及ぶインタビューの中で、Kさんからは他の3人が発したような「劣等感、引け目、恥ずかしい、人とは違う」などの否定的な表現は一切みられなかった。今回の語り手の4人のうちKさんのみが男性であるが、Kさんの意見がジェンダーの影響なのかどうかは定かではない。

【付記】本稿は、「平成19～21年度科学研究費補助金基盤研究（C）課題番号：19510284 研究課題：多様なひとり親家族の韓日比較—未婚・非婚・既婚の親子のジェンダー分析—（研究代表者：竹田美知）」の研究成果の一部である。

## 文献

（韓国語文献）

アン, ヒョジン・イム, ヨンジン(안효진・임연진), 2006, 「한父母家族兒童에 對한 予備幼兒教師들의 認識研究」『大韓家政学会誌』44(3), 61-68。

オク, ソンファ・ナム, ヨンジュ・カン, ウンヨン(옥선화・남영주・강은영), 2006, 「離婚者들의 離婚認識에 關한 質的研究」『韓国家庭管理学会誌』24(1), 223-235。

韓国未婚母支援 network・韓国女性政策院編, 2009, 『未婚母와 그들 子女에 對한 國民意識調査』韓国女性政策研究院。

キム, ギョンスン・イ, ミスク(김경순・이미순), 2009, 「離婚한 女性 한父母家族의 Family resilience 研究—母子保護施設 入所者를 中心으로」『韓国家庭管理学会』27(1), 89-105。

クオン, ジンスク・シン, ヘリヨン・キム, ジョンシン・キム, ソンギョン・バク, ジヨン(권진숙・신혜령・김정신・김성경・박지영), 2006, 『家族福祉論』共同体。

コン, ソンヨン(공선영), 2001, 「母子家族의 經驗과

適応에 關한 研究—變化程度對處戰略 및 適応을 中心으로」『家族과 文化』13(1), 75-105。

ソン, ジョンヒョン・ソン, ダヨン・ハン, ジョンウォン(성정현・송다영・한정원), 2003, 「離婚家族 및 死別家族 兒童에 對한 教師의 認識 —内容分析方法을 活用하여」『韓国家族福祉』11, 9-34。

女性家族府, 2014, 『한父母家族支援事業案内』。

統計庁, 2010, 『韓國의 社会指標』。

バク, ブジン(박부진), 1999, 「裁判離婚時 子女養育者選定の 実態 및 問題点」『家族과 文化』11(2), 99-121。

ヤン, ソンウン(양성은), 2008, 「父母死別에 따른 大学生의 喪失經驗研究」『韓国家庭管理学会』26(5), 39-49。

（日本語文献）

李璟媛, 2012a, 「韓国のひとり親家族における子どもと非養育親との関係—親と子のインタビュー調査から」『社会分析』39, 101-118。

李璟媛, 2012b, 「韓国の家族の变化—ひとり親家族の実態と支援を中心に」『比較家族史研究』26, 93-117。

李璟媛・竹田美知・上野顕子, 2011, 「韓国大学生にみられるひとり親家族に対する意識」『日本家政学会誌』62(7), 425-435。

桜井厚, 2007, 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房。



